



がんばっぺ! 気仙沼



がんばっぺ
気仙沼
応援団

発行日 2011年12月20日
第1巻 第4号
発行 共生社会東日本地震被災者救援・支援の会

気仙沼市震災復興会議委員を招聘 被災地復興支援に向けシンポや交流

共生社会東日本地震被災者救援・支援の会支援の会は、活動の3本柱のひとつ、復興支援に向けた活動を活発に展開しています。この活動の一環として、11月1日から3日、(株)男山本店の代表取締役で、気仙沼商工会議所の副会頭で、気仙沼市震災復興会議の委員も努められている菅原昭彦氏を大阪に招待して、大阪をはじめとした関西における復興支援活動の促進に向け、シンポジウムや交流を行いました。

11月1日、昼過ぎに伊丹空港に到着した菅原氏は、関西で被災地への支援活動を行っている企業を訪問。同日夜には、グロービス経営大学院で「気仙沼の現状と復興に向けて我々にできること」というテーマで講演を行い、講演終了後、交流の開会をもち



ました。
翌2日には、午前中に気仙沼への職員派遣を通じた支援活動を行っている、尼崎市役所を訪れて、稲村和美市長を表敬訪問しました。(写真)
また、気仙沼への支援活動を行っている尼崎あきんど倶楽部と懇談、午後には箕面市商工会議所で懇談の機会をもたれました。同夜、大阪市立大学梅田サテライトで支援会主催の「復興に向かう被災地と私たち：『海と生きる』気仙沼の人々への支援を考える」シンポジウムで基調報告をしていただきました。シンポジウム終了後、懇親会が行われ、翌3日、気仙沼に戻られました。(2,4項に関連記事)



【最東】 141° 40' 31"
【最西】 141° 23' 55"
【最南】 38° 44' 23"
【最北】 39° 00' 10"

気仙沼市について

- 人口:7万3000人余り
- 特産品:海産物が主で、フカヒレ、カツオ、カキ、サンマ、マンボウ、マグロ、アワビ、ウニなど
- 地酒:男山、角星
- 観光スポット:気仙沼大島、徳仙丈山つつじ
- 市の花と鳥:ヤマツツジ、ウミネコ(写真上)

府の来年度「新しい公共支援」事業に採択

被災者支援の会は、大阪府の2012年度の「新しい公共の場づくりのためのモデル事業(震災対応案件)」に応募、採択され、600万円の補助金を受けることが決まった。今年度採択された「宮城県気仙沼地域と大阪の双方向的な被災者救援・復興支援事業」に続くもので、テーマは、「岩手宮城県境地域と大阪の双方向的な地域社会・経済復興支援事業」。支援の対象地域は、これまで活動してきた気仙沼とから、周辺地域の岩手宮城県境地域に拡大。

事業内容は、「震災からの復興をともにめざ

す!ユースサミット」の開催、「ヒューマン・リカバリー」促進、「市場活用型」地域経済復興支援の3つを柱にしている。ユースサミットは、復興の担い手となる被災地の若者と大阪の若者が、今後について話し合うものだ。ヒューマン・リカバリーは、精神的な安定や地域の絆を取り戻すための活動をいう。震災から9ヶ月が過ぎ、義捐金やボランティアが減少していかか、市民ファンドなど市場を活用した支援策を検討していく。

今年度と同様のご協力をお願いします。

目次:

菅原氏、尼崎と箕面で交流	2
気仙沼市震災復興会議について	2
男山本店、菅原昭彦代表取締役をお迎えして	2
「そふとボランティア 3隊」大島訪問記	3
メーリングリスト参加のお願い	4
ボラバス、大島でガレキ仕分け作業	4
編集後記	4

菅原氏、尼崎と箕面で交流

尼崎市は、東日本大震災の被災地支援のため、現在も宮城県気仙沼市に職員を派遣している。11月2日、市役所を訪れた(株)男山の菅原明彦代表取締役に対し、稲村和美市長は、今後も被災地の復旧・復興を支援するとともに、支援活動により蓄積された経験を市の防災対策に生かしていきたいと語った。

その後、菅原氏は、尼崎あきんど倶楽部を訪問。尼崎商工会議所の呼びかけで結成された若手経営者や事業者が自己啓発を通じ、企業の発展と地域の活性化に貢献する事を目的として設立された異業種交流グループで、復興支援プロジェクト・「あきんど義援隊」を5月、7月、9月の3回にわたり、気仙沼に派遣した実績を持つ。

あきんど倶楽部は、尼崎で開催するあきんどフェスティバルで販売する商品の買い出しも気仙沼で行った。「第1回尼崎あきんどフェスティバル」では、あきんど義援隊による気仙沼物産のチャリティ販売があり、気仙沼物産セット(1,980円)を販売。被災地に向いての活動はできないが、気仙沼から送られてきた物産を買うことで、少しでも復興支援のお手伝いをしたいとの市民の声が聞かれたという。

さらに、菅原氏は、箕面市を訪問した。箕面市と共生社会東日本地震被災者救援・支援の会は、北摂つばさ高校「がんばろうつばさネットワーク」との共催で8月に気仙沼高校の生徒を大阪へ招へい、その際、箕面観光ホテル等に入浴などの支援を受けた経験がある、その後、商工会議所の若手メンバーから

気仙沼への支援をなんらかの形で出来ないかとの相談を受け、菅原氏来阪の機会に、懇談が設定された。被災地はどのような状況で、何が課題で、どのような支援が可能かなど意見交換が行われた。

気仙沼市震災復興会議について

宮城県気仙沼市では、東日本大震災からの復興に向け、2011年9月の「気仙沼市震災復興計画」策定をめざし、6月6日に市長を本部長とする「気仙沼市震災復興計画策定本部会議」を設置。これにあわせて、学識経験者と同市の総合計画審議会委員からなる「気仙沼市震災復興会議」が設けられ、菅原氏も委員に選任された。学識経験者は、復興を進める上で重要な柱として想定される都市計画、水産業及び地場産業の再生、新たな産業の振興、防災、地域コミュニティなどの論点に沿って、選任された。気仙沼市の総合計画審議会委員は、同市の将来を見据えた検討に向け、市の総合計画との整合を図ることが必要なため、同審議会から会長・副会長及び各部会長を選任した委員から選出。「気仙沼市震災復興会議」は、6月から9月までに6階の会議を開催、10月7日に「気仙沼市震災復興計画」を発表した。

男山本店 菅原昭彦代表取締役をお迎えして

グロービス経営大学院大阪校・名古屋校統括リーダー 村尾桂子

グロービス経営大学院は、共生社会東日本地震被災者救援・支援の会の要請を受け、11月1日(火)、株式会社男山本店 代表取締役 菅原昭彦氏をお迎えしました。

震災により気仙沼港近くの本社は全壊、発酵途中のものも残ったものの、電気も水道も止まっている中、「酒造りなんてしている場合ではないのではないか？」と躊躇している菅原氏に、「残された気仙沼の生産物を絶やさぬように」、「気仙沼復興の先がけになってほしい。気仙沼のために作って欲しい」といった声と共に、地元の皆さんが酒造りに必要な発電機や燃料を提供して下さったということです。それは、気仙沼に根ざした酒蔵として、そして震災で残った企業として、新酒造りが地域復興に向けての使命に変わった瞬間でもありました。



菅原氏のお話しの中で最も印象に残ったのは、「そもそも震災がなかったら課題はあったはず。元の姿に戻る、という形だけの復興だけではだめなのでは？」という質問に対しての菅原氏の回答です。それは、「その通りなんです、みんな本当に純粋にそれがどうであれ、前の『普通の生活』に戻りたいだけなんですよ」という言葉でした。そして、「被災地のことを忘れずにいてほしい。思ってくれる人がいる、というのが何より勇気づけられるし、前に向かうパワーになる。気仙沼の人はみんな一度は見に来てほしいと思っているはず。是非機会があれば観光でもいいので気仙沼に来てほしい。」と、最後の言葉を締めくくられました。



菅原氏に気仙沼の現状を伺いながら、参加された学生の皆さんと「自分たちが気仙沼のためにできることはないか？」を真剣に考える機会を持つことができ、改めて、普通の生活ができていくことに感謝しつつ、被災地に心寄り添っていくという想いを共有できた時間となりました。

(写真) 右は、グロービス経営大学院における講演の様子。上は、村尾桂子さん(被災者支援の会復興支援プロジェクト副委員長)と打ち合わせ中の菅原氏(左)

いざ、大島へ

「マッサージなら任せておき」「大阪と言えばたこ焼きや」「絵本読み聞かせは出来るよ」「将棋指しながら話できるなあ」と様々な人びとが集まった。「コーヒーを点てるだけで行ってもええのお」との躊躇いもあったが、「会話をするきっかけになるよ」と議論は進む。かくして、経済復興支援プロジェクトのボランティアツアーに29名が参加し大島へ向かった。

到着後さっそく観光地の被災状況を視察。このときのガイドさんの評判が、参加者から非常に良い。震災後の就労支援としてガイド養成の猛特訓を受け、ガイドとして本格的なデビューの日となった。緊張しながらも所々に「3.11」を挟み込み、被災状況、復興、明日への意欲を自らの言葉で明るく話される。参加者にとっては、甚大な被災地の風景に言葉を失いながらも、被災者から元気を頂く瞬間である。

夕方は、白幡昇一氏(汽船沼大島観光協会会長・大島汽船社長)を講師に迎えて、現地セミナーを開催。大島は、気仙沼湾入り口に位置し、震災前の人口は約3400人(今は3075人)東北最大の離島。気仙沼市



街地からはフェリーで25分。海産業(養殖)と観光で成り立つ。3月11日には津波が2方向から襲い島を2分割し、気仙沼湾の大島が延焼し235M²の亀山の山頂まで下草を中心に燃え移った。震災直後には一切の救援隊も入島できず、孤立。災害時は通勤・通学で殆どの人が島を離れていたため、山火事に

対し中学生が棒切れで対峙したという。また、島で民話とともに引き継がれてきたお地蔵さんも流されたが、その民話を「絵本・みちびき地蔵」として制作しお地蔵さんの再建を目指している。島内のコミュニティ再生のために、こうした島民の多くが知る身近な民話・お地蔵さんを重視することを学ぶ。

翌早朝には、震災後に国の天然記念物に指定された十九鳴浜海岸への散策。鳴き砂で非常にきれいな海岸だったが、津波で多くの砂が流失する。だが、残された浜が鳴き砂であることが確認され、国の指定となる。海が少し荒れるとガレキなどが次々と打ち寄せるため、海岸の清掃は繰り返し行なわれている。その様子から「この砂浜の復元なくして大島は成り立たない」という島人の心意義を感じさせる。

「そふとボランティア隊」大島訪問記

被災者の姿に変化が...

休暇村内の仮説住宅が、多様なボランティア活動の舞台である。大島では、3箇所仮説住宅約100軒あり、お好み焼きなどの炊き出し類は全ての仮説住宅に配達する。

それぞれの作業が佳境になると少しずつ人の輪ができ、「大阪から来てくれたん。ありがとうさん」から始まり、「津波はあっちからこっちから来た」と続く。「孫がなあ怖がって私から離れへん」と厳しい現状もボツボツと話される。92歳のおばあちゃんは、震災前に描いた絵3枚を黙って見せてくれ、「これ私の宝や。流されなかった。この絵とともに頑張るネン」との意気込みを感じさせてくれた。被災者の多くは、私たちとの信頼関係が少し出来ると元気に話かけられた。避難所生活から仮説住宅の生活に移り、厳しい状況の中にあっても「一種の落ち着き」がはじまったように感じた。たしかに、私たちに姿を見せるのは元気な被災者だろう。けれども、大きな声で話すことで、仮説住宅から出られない人たちにも「一緒にお好み焼き食べようやあ」とそれとなく誘っているようにも見えた。

被災者曰く、「被災者は一人8つの物語(震災前、地震津波時、被災直後、避難所・仮説住宅生活、村のこと、家族、仕事、将来)を持っている」と。話したいことは一杯あるようだが、他方では、今回の震災があまりにも甚大すぎるため「互いに極限状態を経験しているので被災者同士では辛くて話づらい」(8月に来阪した被災気仙沼の高校生の発言)という状況もあるようだ。一人一人の本当の辛さ、悲しさは、まだ胸の中にあるかもしれない。だからこそ、遠くから来るボランティアに「話を聞いて欲しい」という気持ちがあふれているようにも感じた。まさに、大勢の『震災語り部』が誕生しつつある。

そして、被災者のこうした気持ちにちよっただけ寄り添える可能性を、そふとボランティアというふるまい方は有していたのだろう。ゆったりとした活動なので被災者もじっくりと話せたと思われる。多くの被災者からの頂いた共通した言葉は、『大阪でしっかり伝えてや』であったことを肝に銘じたい。

ツアーのもう一つの目的「被災地でお金を使う」も、楽しく出来た。気仙沼漁港で有料ガイドさんを活用し、大島では「イカの塩から作り」も体験した。おみやげ品では、帆前掛け(船員達が身につける前掛け)の縫製制作技術を活かした帆布バッグ(店名 縁)、被災直後にお酒を搾り出すことができた酒造会社(榊男山本店)の地酒、少しずつ再開された新鮮なお魚(おさかな市場)などが好評だった。帰路は、世界遺産の平泉を観光し、温泉で疲れをとり無事帰阪。そして、約140万円の経済効果が確認された。

気仙沼大島からの評価

今回のツアーで、ボランティア側の「あれもこれもします」という勝手な要望にも柔軟に対応して頂いた大島の皆さまに感謝したい。また、それを可能にした6ヶ月間の大阪と気仙沼をつないで頂いたコーディネーターにお礼を申し上げる。最後に、気仙沼大島災害復興本部のオフィシャルブログに掲載にされていた、以下の文章をご紹介します。

9月23日・24日の2日間、大阪からのボランティアツアーで29名お越しいただきました。自称：「そふとボランティアツアー」。瓦礫撤去できるほど体力に自信は無いけれど、いまの自分にできることで被災地に貢献し、その行程のなかで被災地を見て地元の人たちと話してみたい。そんな想いから、「たこ焼き・お好み焼き」…(略)…多岐にわたるボランティア内容のメンバーが乗り合わせて来たのが「そふとボランティアツアー」です。…(略)…

経済効果が見込め、地元に戻られてからのメッセンジャーも引き受けてくださる「そふとボランティア」は被災地の受け皿次第ではお互いに有意義なものだと実感しました。「そふとボランティアツアー」ありがとうございました！！

こちらこそ、ありがとうございました。

〒530-0001
大阪市北区梅田1-1-2-600
大阪駅前第2ビル6階
大阪市立大学大学院創造都市研究科
都市共生社会研究分野
柏木宏研究室気付
E-mail: kashiwagi@gssc.osaka-cu.ac.jp

ご寄付のお願い

振り込み先:

共生社会東日本地震被災者救援・支援の会

▽ゆうちょ銀行からの振り込み
ゆうちょ銀行
記号14180 番号5465636

▽他銀行からゆうちょ銀行への振り込み
店名 四一八(ヨンイチハチ)店番418
普通貯金 口座番号5465636

共生社会東日本地震 被災者救援・支援の会とは？

3月11日の東日本大震災発生直後、大阪市立大学大学院創造都市研究科都市共生社会研究分野の教員・院生・修了生を中心に設立された任意団体です。宮城県気仙沼周辺地域の被災者への救援と地域の復興活動を支援するために、大阪でNPO、行政、企業と連携しながら活動を進めています。

共生社会東日本地震被災者救援・支援の会は、気仙沼をはじめとした被災地の経済的な復興を支援する活動を進めている。このニュースレターでもお伝えした9月の「そふとボランティア隊」や復興計画の立案に関わった方をお招きしてのシンポジウムなどは、その一部だ。「そふとボランティア隊」は11月にも実施した。参加者のなかには、やはりこのニュースレターで紹介した男山のお酒を50本も買い込んだ人もいたという。

また、12月24日に気仙沼の紫市場がランドオープンするのを記念して、「気仙沼 お出かけマップ」を製作することになった。このマップは、「復興屋台村」をはじめとした、中心市街地でオープンしているお店やレストランなどを紹介するためのもので、現地の方々に配布

高校生ポラバス報告会開催

東日本大震災以降、被災地では、さまざまなボランティア活動が展開されました。特に震災直後は瓦礫の撤去泥かき、物資の配送などについては、多くの若者の力が被災地の復興を支えました。その一方で、メディアを通して被災地の姿や、ボランティア活動に関わる人々の姿を伝えようとする若者達もいました。



大阪府立三国丘高校社会科研究部は、この夏、大阪府内8つの高校生が参加した、共生社会東日本地震被災者救援・支援の会主催の「高校生気仙沼支援ボランティア」(本紙第3号参照)に同行取材し、ドキュメンタリー・ニュース番組をビデオとして製作しました。この番組は、読売新聞でも取り上げられました。ビデオを通して、製作者のメッセージである、「多くの人に真実の姿を知ってもらいたい、そして今何がができるか…」について考えるための集いを12月18日、梅田の大阪市立総合生涯学習センターで開催しました。

大阪ボランティア協会の協力を受け、共生社会東日本地震被災者救援・支援の会が実施したこの集いでは、大阪市教育委員会の矢野裕俊委員長が挨拶。その後、第一部で「高校生気仙沼支援ボランティア」のビデオ製作した三国丘高校の瀧本善斗さんが報告を行いました。第二部では、関西大学社会学部の小山朝子さん、三好茜さん、角田都さんがゼミの課題「生きる」について、東北大震災を取り上げ、現地取材を行い、記事を、自分たちがこれからできる支援とはを参加者とともに考えるセッションとなりました。



☆メーリングリスト参加のご案内☆

被災者支援の会では、メーリングリストを作成して、情報の伝達と共有化を図っています。どなたでもお入りいただけますので、ぜひご参加ください。参加申し込みは、以下まで。

SHINKA Junko <shin_casshern@hotmail.com>

編集後記

する予定だ。お店やレストランの再開や新規オープンが続いていくと、それにあわせてバージョン2、3…を発行していくことになる。次号で、その詳細や反響をお伝えしたいと思う。

私は、「そふとボランティア隊」には行きそびれた。その代わりというわけではないが、知人へのお歳暮(?)として、男山のお酒や気仙沼復興支援ギフトを贈った。昨年までは、障害者の作業所の生産物を販売している、NPO法人トウギヤザーから贈っていたものだ。今年もトウギヤザーにもお願いしたが、被災地優先となった。被災地と被災地以外の問題や取り組みへの支援や連帯。これを両立させていく考えも大事なのではないか。被災地の復興に関わるなかで、この思いを強くする。(HK)